

---

# 魔法先生ネギま！アンチなにそれおいしいの

神白漣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギまー・アンチなにそれおいしいの

### 【Zコード】

Z4842Y

### 【作者名】

神白漣

### 【あらすじ】

世界は暗黒へと導かれる。それを阻止するために立ち上がった勇者翔。人類の明日、日の光を見ることはできるのだろうか。すべては彼らにかかっている……

…………うそです（笑）テンプレ転生者が面白おかしく第一の

人生を歩んでいくお話です。

## プロローグ（前書き）

初投稿です。温かい目で見てください。

## プロローグ

初めまして。俺の名前は天年翔。年は、18。今年度で高校卒業のはずだった。なんで、過去形のかつて？  
それは・・・・・・

俺がセツキしんだからさ（笑）いや、笑えないよ。死にかたが虚しいですよ。進学校の生徒の朝は早い。なぜなら、補習という名の拷問があるからだ。真剣な話、朝の7時半に登校とか俺に死ねと言つてんのか？まあ、もう死んじやつてるんだけどね。で、今日俺は珍しく寝坊してとても急いでいたんだけど、やはり朝食は食わんといかんやろ。だから、家のババアに「朝飯」て言つたのよ。え、反抗期かつて？いや、もうねそんなもの小学生の時にすぎました。でも、ババアも寝坊で、なんも作つてなかつたから、バナナを食べたわけよ。それで、食い終わつたバナナの皮を投げてしまつたのが、運のつきやつた。そう、俺は急いで学校に行こうとして、バナナでを・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・滑らせなつかたんだ。えつ、そこはすべりよ、だつて？うん俺もそう思うだつて俺の死因は葱を踏んで、

転んで頭を強打してしんだんだ。絶望した！足を滑らせた原因が葱なことに絶望した！と、当初はあまりの残念さに、周囲の状況に気づかなかつたのだが、落ち着いてみると、俺は驚愕した。だつて、目の前に土下座している幼女がいるんだぜ。お兄ちゃんビックリ！

「あの、なんで君は土下座してるの？」

「本当に、すいませんでしたーーー！」

What!?

説明中

「つまり君は神様で俺の書類（人生）の幸運を誤つて最低ランクにしちゃつたら、俺死んじゃつたわけ？」

「はい、そうですね。」みんなさい！」

「ええーー！怒るところ！・・・原因はあなたの母親が昨日使った葱を外に出していたからです。」

あの…………ぐそハハア!!!!!(全国のおかさんすいません)

主人公暴走のため次回に続く？

「続かんわ、ごめん神様取り乱して」

いえ、誰しも叫びたい時があるものでしょう」

なにこいつ、お前が一番の原因だ。で、結局なんで俺は「んなところにいるんだろ？」

「それはですね、私のミスであなたを不幸にしてしまったため転生してもうつかと？」

## 転生？あの輪廻転生のこと？

「まあ、せう捉えてせうして構いません。つきまして何か要望はありますか?」

「要望で何を?」

「例えば、『NARUTO』の輪眼とかブリーチの斬魄刀とかです」

「つまりアニメや漫画などの技や能力などを要望していいところとか。なあそんな能力が必要なほど危険な世界なのか?それとぞさらだけど俺の転生場所でビコ?」

「やつですね、まあまあ危険でしょうか。それと転生場所は『魔法先生ネギま!』です。」

「俺はねぎに恨みでもかつているのか。」

「それで、要望はどうします?」

「やつだな、まずは俺の幸運ランク、直感ランクをEXにしてくれ。」

「

「へえ、そこから行きますか。はいいですよ。」

「で、次に『伝説の勇者の伝説』の全ての式を解くものと全ての式を編むものがあわせた、ライナ＝エリス（寂しがり屋の悪魔）をくれ。もちろん代償なしで頼む。」

「これは、チートですね。でも代償はなしは無理なので、魔力の消耗ですね。」

「ああそれでいい。後これが最後なんだが『D·Gray-man』のノアの能力をくれ。これは人間を殺したいとかの殺人衝動を抑えてくれ」

「はい、わかりました。わたしもその漫画好きですから、力入れて頑張ります。それじゃ、新しい人生たのしんできてください。」

「ああ、神様ありがとな。」

そういうつて俺の意識は闇へと沈んでいった。

Black out , , ,

## プロローグ（後書き）

主人公チートですね。私は自重しませんので。

次回、主人公の転生先がわかります。では、よろしく。

「これは田舎です。」（前書き）

なんとか、書き終わつました。では、どうもつたない文章ですが  
お読みください。

「これは、どこなんだろう？」意識が戻り周囲の状況を確認したところ自分が縮んでいた事実に驚愕したよ本当。あの幼女神、赤ちゃんからやり直す言えや。ということで、ベビーベットから周囲を見ること叶わず、睡魔に襲われそのまま目を閉じていった。お休み。

五年後・・・

いやあ～久しぶり。自分の新しい名前とここがどこなのかわかつたよ。あの後、うちの母ちゃんに起こそれてビッククリ、母ちゃんマジ美人。で、どうやら俺の名前はマギ・スプリングフィールドというらしい。うん、外人さんだね。で、ここはイギリスのウールズの森で魔法使いの隠れ里らしい。俺さあ『魔法先生ネギま！』の原作で知らないんだよね。だから、最初、村で人が飛んでいるのには腰を抜かしてしまったよ。題名に魔法であるじゃないかって、勘弁してくれよ、一般ピーポーだった俺に、空飛ぶ人間や擬似雷落とすやつ見たら、わあ～ファンタジー何てのんきなこといつてられません。

あ、能力だけどね、神様は約束守ってくれたよ。まず、幸運と直感だけど、新しいお母様、下の弟を産むとき、産んだら死ぬってお医者さんにいわれてたけど、滅茶苦茶神頼みしたら、すごく安産でした。これおれのおかげじゃない？後、直感だけどだいたい何か自分にとって都合の悪いことが起きるのがわかるよ。うん、これは本当に助かる。

次にライナ＝Hリスだけど、これはやばい。ありとあらゆる構成式が見えるし、一回全てを解く式で森の木を解除したら制御できず

に森の木全部消してしまい、あわてて全てを編む式を使って修復したよ。そのとき、軽い脱力感に襲われたなんだけどこれが多分代償の魔力消耗なんだろうと思いました。

最後にノアの能力なんだけど、3歳ごろ死ぬほどの原因不明の高熱に襲われ1か月悪夢にうなされたよ。で、世界の終焉だの人間を殺せ殺せとうるさかつたけど、神様がちゃんと殺戮衝動を抑えてくれたらしく、暴走することなく目がさめたよ。で、そのあと顔を洗おうとしてこちらの世界にきて何度目かわからぬけど、口をぽつかんと開けたままのあほ面してしまった。そういうや、神様、D.Gra、力入れて言つてたつけ？しかも俺、容姿がティキミックなんだよね。変な所まで似せないで欲しい。だつて、鏡見たら額に聖痕が浮かび上がっていたんだもん。母さんにえらく心配してきて宥めるが大変だつた。でも、抱きつかれたときに胸が当たつた時は役得とか思つたけど。で、高熱出した後ノアズメモリーのおかげなのか、力は簡単に使えた。お気に入りは快樂のメモリーかな。空気の足場をかためて空を飛んだ時自分も脱一般人になってしまったこと自覚し、少しだけ寂しかつたといつておこう。

「兄貴～！飯らしいぞお～！母ちゃんが来いつて。」

「うん？考え方していたらいつの間にかこんな時間か。

「わかった、今いくよ、ナギ」

続く！

川口は田舎者です。（後書き）

かなりの「J都合主義ですね。ナギの兄ちゃんとしてがんばりますや（笑）

【定期連絡ですか。（前書き）

今日は少し短いです。ではお楽しみを。

やあやあ、朝の人にはおはよう、昼の人にはこんにちは、夜の人にはこんばんは。みんなのヒーロー、マギだよ。えつ、みんな、そんな悲しい子を見るような目で見つめないで

「ほん、ふざけすぎですいません。この世界に産まれて早十年。うん? 進むのが早すぎるだつて? これは、大人の事情です。いい子、悪い子関係なく、深く突つ込まないと非常にうれしい。

5歳のころから、魔法使いとして修業始めたんだけど、大方の魔法は使えるよになつたよ。まあ、魔眼のおかげなんだけど。でも、魔力制御は大変だつた。俺は、先天性魔力超過現象という病気で、普通の魔法使いの三十倍の魔力保有者らしい。そのため、子供のころにはその魔力には耐えられないで、『ハーメルス（神を縛る紐）』というマジックアイテムで一般魔法使いレベルまで抑えている。それでも、本質の魔力量は変わらないため制御が大変。完璧にできるようになるまで三年かかった。

後、気なんだけど、瞬動、虚空瞬動ぐらいでほとんど手を付けてない。それより魔法が楽しくてしようがない。術式がわかるおかげか、パズルのように入れ替えたり組み替えたりしているうちにはまつてしまつた。そのため、周りに魔法オタクとよくからかわれる。

周りといつたが、うちの村はそこまで大きくないため、子供の数が俺とナギ後、年の離れた兄を含めて、5人ほどしかいない。そのため、俺とナギという小さい子供はまるで村の子供の用に扱われ、悪さばっかりするうちのおバカな弟は近所のスタンおやじにいつも

怒鳴られている。

俺はどうなんだかつて？前世は後少しで社会人な人間が子供のあふれるパワーにはついていけません。しかも、うちのマリア母様は病弱なため、なるべく大人しくして、家からあまり出ません。えつ、このマザコンやうですつて？失礼な、その通りです。だつて、荒ぶる炎のようになに紅い滑らかな髪でありながら、今にも消えてしまいそうな夢げな微笑み。これを女神と言わずして何と言つ。と、まあ楽しんでいるおれです。

side out

マリア side

私には三人の息子がいる。長男はもう立派な大人で村を離れて仕事をしている。今私はマギとナギの子育てが大変。ナギは活動的でよくイタズラをしては、村長のスタンさんに怒られている。マギはナギと違いとても大人しい子で病弱な私をよくサポートしてくれる。最初のころはいろんな病気にかかつたりして大変だったけど、いまではナギの面倒をよく見てくれるいいお兄ちゃんだ。それに、勉強もよくできとても優秀だ。だが、あの子の魔法関係に関してはいまだに苦労が絶えない。五歳のころ初めて魔法の初步『プラクテ・ビギナル（火よともれ）』を唱えさせたら、火炎放射のように火が出て危うく家が燃えそうになつた。そこからは、まず魔力制御に力を入れながら教えようと思った私は悪くないと思う。しかし、マギは天才だつた。一度教えた魔法はすぐに覚えてしまい、しかも現存する魔法をより効率よくしたり、威力をあげたり、さらには新しい魔法まで作つてしまつた。しかもその作った魔法がえげつない。魔法反射でなに！？アンチマジックフィールド？魔法が使えないじやない！ととんでもないものを作つていく。たぶん本国やアリアドネー

の学者たちに見せたら腰抜かすわね。まあ、このように私の可愛いエンジエルちゃんマギが天然魔王に見えるのは気のせいじゃないよね？はあ～私の子の育てかたどこで間違ったかしら。

side out

## 定期連絡です。（後書き）

いやあ勝手に解釈してしまいました。お母様の名前ありきたりですがどうですか。

やはり、シンプルイズザベストだと思いました。

というかナギの母親はどうなっているのかわからなかつたので勝手に改造しました。

では次回はいよいよ冒険のプロローグです。よろしくお願いします。

旅は道連れ、俺は拉致られ…？（前書き）

本日一回目の投稿。

よろしくお願いします。

旅は道連れ、俺は拉致られ！？

三人称 side

ここはメルディニア魔法学校。旧世界において小学生程度の子供たちに、魔法と一般教養を教える機関。また、裏を返せば「立派な魔法使い（マギスティル・マギ）」つまり、メガロの忠実な犬を育てるための場所である。

そこに一人の天災がやってきた。二人は今校長先生に怒られている。

「アニキ～俺眠たいだけど、寝ていい？」

真っ赤な髪を持つ兄弟のうちのアホ毛の弟が、目をこすりながら自分の中へ尋ねている。

「駄目だ、今はとにかく爺の話聞いとけ。聞かないと癪癪を起して説教が長くなる。」

前半だけ聞けば、優等生だが後半ですべて台無しである。

「これ～マギ～ナギ～儂の話を聞いとるのか～～」

「～聞いてない。」「～

「うがあ～～～」

今日この一人がここに呼ばれたのには理由がある。弟のほうは座学が大嫌いで、授業は抜け出すは、教師に雷の上位古代呪文『千の雷』をぶちかましたりと問題を犯し、兄のほうは成績は優秀だが、優秀過ぎて周りがついてこれず、ついには一人の魔法教師が自信をなくし、田舎に帰ろうとするなど、一人ともアプローチは真逆だがかなりの問題児らしく、他の教師では手におえないため校長室に呼び出された。

が、二人の問題児ぶりはすさまじく校長も、もうゴーイングもいよいよ、安西先生、とフォフォフォの白髪のぼっちょりの幻覚が見えたらしい。

「ナギ、どうしてお前は教師に魔法を唱えたのじゃ。魔法は危険なものとわかってるじゃうつて」「

校長は気を取り直して少し咎めるように少年に聞く。

「だつて、あいつ俺が魔法が覚えられないのバカにしやがったんだぜ。しかもアニキの名前まで出してきて。だから、ついカツとなつて、ヽヽヽヽ」

ナギは最初は怒りながらしかし、後から自分がしたことにして少し反省し気落ちした声で喋った。ナギには一つ違ひの兄がいる。兄は本物の天才だと思っている。魔法の腕、戦闘術すべてにおいて自分より強い兄を尊敬していく超えたいと思っている。一体お前はどこの戦闘部族だと突つ込みたい。

校長も今回のことにはナギだけが悪いわけではなく教師にも責任があるとわかった。後、マギの無自覚天災のせいでもあるが。優秀なものは何かと僻まれるがマギに至つては、魔法ではこの学校で右に

出る者がいないバグ。そのため、僻みがナギに降りかかっているのが現状だ。まあ、術式無茶苦茶な状態で千の雷を発動させるナギも十分バグだが。

「まあ一人ともこの学校に少しずつでいいから慣れていくのじゃ。友達を作るでも何でもいいから楽しんでいきながら大人になるための準備をしなさい。さあ明日も早いからのおー。ここいらでお開きじや。気を付けて帰るのじやぞおー。」

俺精神年齢大人なんだけど、と思いながら何ともしまらないマギがいたらしい。

side out

ナギ side

おっす！俺はナギ・スプリングフィールド、最強の魔法使いだぜ。ま、まあ兄貴には勝てないんだけど。はあーだいたい魔法合戦したら確実に負ける。近接戦闘に関しては身体能力では勝てるけど、アイキドウ？だとかいう、日本の武術でいつの間にか倒されるし。それで兄貴になんて、日本の格闘術を知っているのか？て聞いたらすごく焦つていたけどなんでだろう。まあなんか旅の人に教えてもらつたて言つてたけど。それで納得した俺を見てこいつがアホで良かつたつて聞こえたのは聞き間違えだろうか？

しかも「情報は命だ」が信条らしくなぜか聞いたらほとんど答えられる。何でも知ってるんじゃないか？と言つたら何でもは知らない、知つてることだけだといって、その後俺は厨二病じやない、厨二病じやないと悶えていた兄貴は気持ち悪かつた。

で、結局兄貴には全くかてねえ。だけばいつか必ず勝つてやる。

そのためには・・・

side out

マギ side

家に帰つたら、母さんにも怒られた。ナギは「あらあら」とほんわか注意だつたけど、なぜか、俺だけは「お願い自重して」と頼まれた。異様に母が疲れているのは気のせいだろうか？母さん大丈夫？と聞くとあきれた目で見られた。少し寂しかつたのは言つまでもない。

魔法学校に通つてから思つことなんだけど、俺は全然この世界ことを知らない。いや正確には裏社会の現状を知らない。情報はあらゆる富より価値があると俺は思う。どうにかして、世界のことを知れないだろうか。そんなことを思いながら日々の訓練をしていた。

朝、目が覚めたら俺は我が弟に拉致られている。何でも魔法学校では俺より強くなれないから外の世界で強い奴と戦いに行くらしい。俺も情報集めがしたかつたからそこまで気にしない。ただ、俺も外でいろんな奴と勝負したら強くなれるんじやないか。それを言つた時のナギのあほ面は死ぬまで忘れられない。

side out

ナギがマギを超える日は来るのだろうか？

マギ十一歳、ナギ十歳、相も変わらずしまらない旅立つであつた。

旅は道連れ、俺は拉致られ！？（後書き）

ナギのアホっぽさは出せたでしょうか？

ナギの赤い悪魔化。彼にも遠坂家の呪いがかかっているのでしょうか。

それでは次回、アリビレオ・イマ  
アリビレオ・イマスケベ（青山詠春）と異常性欲者がでます。

ノシイー

旅にお金は必要ですか。（前書き）

今回はあるのマッシュリーの登場です。

駄文ですが、お楽しみください。

旅にお金は必要です。

マサニ  
sidi  
e

村を出た俺たちは父親の知り合いがいる麻帆良学園を目指して旅をはじめたんだ。麻帆良は前世の故郷日本にあるらしく、最初はね、俺は柄にもなくはしゃいでいたんだよ。そう、麻帆良についてから、うちのバカが一銭の金を持つてきてないという天然ボケをしるまで

「お前やつぱバカだろ。……いや知つてたわ、お前がどつしょ  
うもない鳥頭て知つてたよ。でも、金くらいで出ていく前に用意しと  
けよバカナギがあー！」

ヒュウ～、ドッカーン！！！

「うを、あぶね。しうがねーだろ。忘れちまつたもんは。それ  
よ、急に魔法ぶちこんでくるな、バカアーチー！」

ゴロゴロ、ズツカン！！！

なんかいろいろ疲れたよ、お母様。このアホ（ナギ）の面倒を見るのは大変。とにかく今はどうやって路銀を稼ぐかだな。今ちょうど、麻帆良祭という行事中らしいから何らかの賞金大会か何かないかな～。うん、なんかの広告か？ 何々、賞金百万円、まほら武闘会だつて。ラッキー、いい物件を見つけた。さすが幸運EX。あれ？ でも、なんで俺って騒動に巻き込まれやすいんだろう。また、あの

幼女の仕業じゃないだろ？ あやしい。

「ナギ、この大会に出るんだ。賞金出し、もしかしたら強い奴と戦えるかもしないぞ。」

「うお、さすが兄貴。早く申し込もうぜ。」

「うん、そうだな。受け付けは中央広場であるらしくして、締切が近いから急げ。」

「おひつ」

俺たちはすぐに受付をして、予選に出た。俺たち一人はAプロックらしい。

・・・はつかり言おう、弱かつたと。まあ、一般人相手じゃこんなもんか。でも、Bプロックの日本刀持った剣士は強そうだった。今のナギ同等、近接戦闘じゃ俺も負けるかもしないな。なかなか楽しみだ。

強い相手との戦いは心躍る。ふふ、明日の決勝トーナメントは楽しみだ。青山詠春、どんな闘いをするのかな。やつぱ観客の度肝を抜きたいね。まあ明日に向けて仕込んでおこうってと。

次の日・・・

「さあ一やつてきました、まほら武闘会決勝トーナメント。古今東西あらゆる武道の達人が己の体で、技術で、そして心でぶつかり合うこの熱き闘いが今始まる。括田せよここれが武の極致である。」

「おー…………！」

ナレーターの演説のおかげか、見に来た観客のテンションは一気に上昇している。ここ麻帆良はいろいろとぶつ飛んでいる。麻帆良にある丘の上には世界樹と呼ばれる木がある。その木、真の名を神木・蟠桃というらしく、世界でもトップクラスの魔力含有量らしい。また、靈地としての格は一級ぽい。そして何より、学園全体にかけらされている認識阻害魔法。これのため予選でも魔力や気を無詠唱ではあるが使っている人を見ても何もおかしいとは思っていないらしい。

間違いなくここは魔法使いの天国だね、一般人からしてみればいい迷惑だろうけど。

さて、決闘への準備でもしますか。ナギと当たるのは決勝か。そこまで負けないとと思うけど、油断はしちゃ駄目だな。

時が流れ準決勝・・・

「次は準決勝、ここまでその精錬された剣技を見せてくれた青山選手。対するはこの大会に神風のごとく現れたスプリングフィールド兄弟が兄マギ選手。ここまでの一撃で倒してきている両者。どんな闘いになるのか必見です。それでは、始めっ！」

俺は合図の後すぐ瞬動で相手の後ろに回り込み遅延呪文で魔法の射手17矢を撃ち込む。

しかし・・・

「神鳴流に飛び道具はきかん。はあー、斬岩剣」

ていつて放った魔法全てを撃ち落とされ、なんか地面にクレーターができるほどの大段切りがきた。木刀でこの威力、真剣なうらぎのくらいと少しひびつた。

しかし、こちらもなめてもうって敵わない。これでも魔法世界の異端児とまで言われている俺がただの魔法の射手など打つわけがない。

「青山詠春だつけ。すごい剣の使い手だね。君みたいな人を待ていののかな、とても楽しい闘いだったよ。」

「確かに私は京都神鳴流青山詠春です。マギ殿も入りと出がほとんどわからない瞬動いやもつそれは縮地ですね、その技術すばらしいものです。それよりだったよ、とはどういう意味なのです。私はまだ闘えますよ。」

「ふむ、まだ気づかないの。ほら周りの観客も叫び始めたよ。」

「なにを、言つて……はあー？」

詠春はいつの間にかパンツ一丁になっていた。俺は魔法の射手に衣服の繊維を溶かす魔法を組み込んでいたのだ。それが木刀で撃ち落としたあと発動。空氣中に分散した魔力残根が服を溶かしたという絡繰りさ。まったくもって無駄遣いと言われるが、武装解除と違つてこちらのほうがロマンがあるだろ（キリッ）まあ、男に使うものではないが、ヽヽいや、もう男に使うのはこれつきりにしよう。気持ち悪い。

「はいポーズ。ほらほら、君の写真集を全国ネットに流してあげるから頑張つて。きっと露出狂のお友達ができるや。」

「うおー！そんな友達いらないからー！カメラで撮るのはやめてくれ。参つた参つたからー！」

パシャパシャ、パシャパシャ

「うーん…………いやー（キラリンッ）」

「…………」

「」の後、大会監督が止めるまで赤い悪魔のいじめもといカメラのフラッシュ攻撃は止まらなかつた。

一人の変態ドリのせいでの、将来勇猛な青年の一生のトラウマがで  
き、観客が同情と憐みの言葉を送ったのはいつまでもない。

これが将来サムライマスターと呼ばれた英雄と紅蒼の魔王、戦場  
カメラマン、敵に回したら必ず殺される（社会的な意味で）と呼ば  
れた英雄との一方は決して思い出したくない哀愁溢れる出会いであ  
る。

続く  
……

## 旅にお金は必要です。（後書き）

まず一言、どうしてこうなった（笑）いやあ～最初はまともに闘わせるつもりだったのですが、最後はまるつきり主人公が変態化してしまいました。

私的にからかうのNO2に位置してますから彼。

詠春君が精神的苦痛で円形脱毛症にならないよう、ご冥福をお祈りいたします（笑）

次回の投稿は少し遅れるかもしません。まあ、そこは学生の忙しさを考慮していただけた幸いです。

## 新しい仲間（前書き）

三日ぶりの更新です。なかなか大変でした。  
ではお読みください。

「あ、あたしが、路銀を忘れたのは謝るからも、もう許してくれ…」

「何言つてんのナギ。俺はぜんぜん怒つてないよ~。」

「滅茶苦茶怒つてんじやん！目がマジなんだよー。」

「あん？なんか文句あんの？幼少の頃の黒歴史を暴露されたいの？  
うん？」

「なまじつてすんませんでした…だからあの事だけはあの事だけ  
は…！」

闘技場の中心に手足を縛られている赤毛のアホっぽい少年ともう一人は同じく赤毛のじやがひどく冷酷な微笑みを浮かべながら魔力弾を当たるか当たらないきりきりに撃つ少年。これ何といふんじやつたかのあ？まづ、そうじやつた、こうこうの場合はこうこうじや。

「これ、なんてカオス？」

一週間前じゃったかのよ、知り合いの魔法使いから息子一人がこちらに来るという連絡があったのじや。兄は魔法反射というアリアードネードの学者たちが挫折し不可能としたその理論をわずか六歳のころに確立したまさしく魔法の申し子。一方弟のほうは理論など全てぶつ飛ばして魔法を使うバグ、また調査によると精霊に愛されておるらしい。

タイプは違えど一人とも間違いなく天才。しかし、友人の話しへかなりの問題児らしい。儂は当初そこまで気にしておらんかったのじやが、その意味がこの大会で良くわかつた。特に兄のほうは敵に回したら絶対にいかんタイプじや。儂もよく妖怪とまちがえられるがマギ・スプリングフィールドは悪魔といふ言葉でさえ震むチートども魔王様じや。マジ儂ちびりそう。

「俺も家族の恥は言いたくないよ。だからぼうじはしない。安心しろ。」

「本當か！？ありがと」「ただし勝負はまだ終わってないからね」「いやー！？」

そろそろ止めたほうが良いじゃろうか？じゃがさつき婿殿を助けたときすいぐんにらまれたのじゃが、どうすればいいんじゃろう。とほほ、腹が痛い……

side out

ナギナナギ

ふういい仕事したよホント。久しぶりにストレス発散げふんげふん強者との闘いがてきて気持ち良かつたあ。

あの後、俺はナギをボコボコした後棄権した。え、なんでかつて優勝しようがしまいがどちらにしろお金は入ってくるからね。そこまで順位は気にしない。まあナギの奴は戦闘の疲れで保健室で休んでるけど。いや色々たまつてたんだろうね、半年分ぐらいの恨みを込めて魔力弾ぶちこんだし。

で、それよりも

「さつきから俺いや、俺とナギを観察してる奴そこに隠れてんだろ。出でこよ。」

「おやおやバレテないと思つていたのですが、いつ頃から気づいていたのですか。」

「おやおやから俺たちのことを見ている奴がいる」とはわかつていつ。まあ敵意がないからほつといたんだけど、さすがに観察されるのは気持ち悪い。

「うへん今日あの剣士と鬪つているときかな。なんか観察するような視線を感じてな、なんとなくね。で、一体何の用?」

「うへんながら俺は戦闘態勢に入る。いくら悪意感じなくとも隠しているところもある。」こちらの世界はかなりシビアな世界だ。油断したら最後死があるだけだ。

「ええ、実は私をあなたたち三人の仲間の入れてほしいのです。」

「はあ? それよつ三人とはどういう意味だ? 俺たちは一人で旅をしてるんだが。」

「マジで何言つてんだ」「こいつ状態である。

「ふふ、私のことほ気づいたのにもつ一人の方は気づかなかつたようですね。ねえ、露出狂さん」

露出狂！？ま、まさか！？

「私は露出狂ではない！だいたい人のトライカマを思ひ出すの！」

「青山詠春（露出狂）ーなんでー！」

「なにか私の名前に不愉快な補足がついているようなんだが。まあいい。私もお前たちの旅に連れつていつてくれないか？」

「マジで言つてんのか、お前のトライカマを作つた原因だぞ俺。」

実はこいつマゾなのか。俺は男のマゾに興味なんぞないぞ。つーか変態じやないか。

「いやなんでさりげなく俺から距離をとるんだ二人とも。まあいい、本題に入るぞ。確かにお前はトラウマの張本人だが感謝してる部分もある。私は青山家の中でも天才と呼ばれていて自分でも知らないうちに天狗になっていたようだ。しかし、世の中にはまだまだ強い奴がたくさんいることがわかつた。私はまだまだ強くなりたい。そのため君たちについていきたい頼む!」

へえ～逆上するんじゃないくて、自分の欠点を素直に認め改善しそうとするなんて人間で見てんna。俺だったら何倍返しにしてやるつかと考えるのに（笑）

「うん、まあいいよ。いちようナギにも聞いてみないとわからんけどたぶん大丈夫だろ。俺のことはマギと呼んでくれ。」

「恩に着る、私のことは詠春と呼んでくれマギ。」

「で、お前は結局誰なの？」

なんだかんだ言いながら、このロープ男の素性は一切わかつていない。不気味すぎる。

「私はアルビレオ・イマ。アルと呼んでください。私は世の中の面白いものを探して旅をしています。今回はあなたたちと旅をすれば面白いことがあると思いまして話しかけてみました。」

「素性はす」「座じこけど、たぶん教えてくれないだろつた。まあと  
りあえず、

「いいよ、あんたもなかなか面白そうだ。よろしくアル。」

「うひて、四人（一人爆睡中）はともに旅をする仲間となつた。

「アニキ晩飯、腹減つたあー、むむむむむ。せ

「空氣読めやーのバカナギ！」

「ンシー

「あああ—————！」

四人の出発はまだとおいのであった。

続く

## 新しい仲間（後書き）

だんだん、主人公が壊れていってます。誰か止めて~。まあ私が原因なのですが。

今回の話はどうだったでしょ~つか。

なるべくほのぼの路線で行きたいと思います。

次回は魔法世界に入ります。

それではお楽しみに。

## 結成、紅き翼（前書き）

ど～も、お久しぶりです。今回は魔法世界での話です。

## 結成、紅き翼

マギs.i.d.e

おっすーおら語空<sup>ムンドウス</sup>じやなぐてマギだ。俺たち四人はイギリスにあるゲートを潜りいま魔法世界<sup>マギックス</sup>に来ている。空飛ぶUMAや亜人と呼ばれる猫耳少女など一部のマーティアなら鼻血を出しながら輝<sup>ハ</sup>がうな光景である。

「おい、みんな。これからどうする?」

「せうですねえ~まずは学園長の紹介状をもつて連合に行きましょ<sup>う。</sup>」

「やうだな、俺たちはまず拠点<sup>さか</sup>がしに入らないといけないから、近衛殿の<sup>ご</sup>厚意<sup>おごろひ</sup>にお甘え<sup>あま</sup>みつ。」

「俺は闘<sup>たたか</sup>えるなど<sup>こ</sup>でも<sup>こ</sup>ー<sup>こ</sup>だ。」

アルと詠春は同じ意見らしいな。まあやうひんが妥当<sup>たとう</sup>だろ<sup>う</sup>。あとナギお前にはあまり期待しないから。

「じゃあ、このマクギル元老院議員<sup>いん</sup>つて人のところに行きますか。

「アル交渉」とは任せた。」

「ふう、あなたもできるでしょう。」

「え、だるい」

「即答ですか。わかりました。では行きましょうか、（メセンブリーナ連合）へ

そして俺たちは元老院へと足を運んだ。最初に受付をすまして客間へと通された。待つこと十分、ようやく現れたのは人のよさそなうなオッサンだった。

「おお、待たせてすまんのう。儂はマクギル、元老院の議員じゃ。して、君たちが近衛門の紹介の物かの？」

「初めてまして私はアルビレオ・イマと申します。」

「私は青山詠春です。」

「おれはマギ・スプリングフィールド」

「俺はナギ・スプリングフィールド。よひくなマクギルのオッチャン。」

「ハジナギ議員に対して何といつ。」

「よこよこ、そんなに形式ばつた言葉は使わなくていい。」

なんともフレンドリーなオッサンだな。まあそのままが楽だけど。

その後、アルの交渉の結果、俺たちは連合の志願兵として紛争地域や戦場に出る」とになった。まあナギの奴が後先考えずOK言つちまつたからな。あいつ戦闘しか興味ないだろ？

近年、連合と南にある黒人の国ヘラス帝国との間で戦争が起き始めようとしているらしい。そのため戦力が是非にも欲しいらしい。まあ金が良かつたし、当初の目的の強者との闘いができるからナギと詠春はいいだろ？

さて俺もそろそろ活動しますかね。

「なあ、俺たちのチーム名を考えないか？」

ナギが突然提案を出してきた。

「いいですね～、私は昔戦隊モノに憧れてたんですよ。」

「お前はたぶん悪の幹部の参謀だらうな。」

「それならお前は魔王を倒した後、やつと勝ったと思つたら」＼  
「999の超無敵大魔王様だらうな。」＼

「「「うんうん」」

「馬鹿野郎！俺が大魔王！」ときにはさまるか……。」

「「「突つ込むとこ」」」

なんかアホみたいな」とやつてゐるけど、なんんで大丈夫か？

「で、なんかあるか詠春？」

「話が急に変わったな。そうだな和同一門」

「サムライですね、わかります。」

「私は幼女愛好会がいいです。」

「うん、とりあえず死ね。」

はあ、まともな案がねえ。

「ナギはなんかないのか？」

「紅き翼つてのはどりだ？」  
アラルブラ

ナギが自分で考えて発言するなんて、お兄ちゃんは感覚「なんか、雑誌に書いてあつたんだ。」

「ぶつはーー！」

本日のナギの飛距離プライスレス。

これが伝説に残る「紅き翼」<sup>アラルフラ</sup>の結成の瞬間とは誰も信じたくない事実である。

続く…

## 結成、紅き翼（後書き）

次回は人物紹介します。

よろしく。

## 主人公紹介（前書き）

少し改訂しました。

## 主人公紹介

主人公：マギ・スプリングフィールド

年齢：13歳（大戦期）ナギの一つ上。

性別：男性

ステータス

筋力：C + (A +)

耐久：B - (EX)

敏捷：A + (A +)

魔力：S + (S +)

気力：A - (A -)

幸運：EX (EX)

\* : ( ) はノアの能力を使った場合。

始動キー

ネギス・ネガサス・ネー・ジーサス

葱への深い恐怖心から生まれた始動キー。まあまあカッコよくない？

能力

・魔眼（ライナ＝エリス）

『伝説の勇者の伝説』に出てくるあらゆる存在の構築式が見え、また視認したその存在を分解したり構築したりすることができる。原作では能力の代償に「自分の愛する人を犠牲にする」ことで発動す

るが主人公はその代わりに魔力消耗となつていて。魔法使いとして主人公は本質の能力ではなく、魔法の術式の解読によく使っており戦闘ではあまりにも強力なため緊急時以外は使わない。

#### ・ノアズメモリー

『D . G r a y - m a n』のノア力。しかしこの能力を使ってしまうと快樂（万物の選択）のメモリーで攻撃事態が効かなくなるというムリゲーになつてしまふので、これも緊急時以外は使わない。だが、色（あらゆるものに変化する）、蝕（相手の中に蟲を忍び込ませるなど）、智（相手の脳を自由にできるなど）といつた能力は諜報活動の時よく使う。また、移動するのが面倒な時よく夢の能力を使つてるとかなんとか。

#### ・直感（EX）

これはもはや予知や予言レベル。だいたい十秒先の行動がわかる。また自分の危機などは寝てているときなどに夢で出てくる。しかし、なぜかギャグ補正やナギのアホな行動には機能せず若干能力をくれた神に対し腹を立てている。

#### ・巻き込まれた体質（EX）

俗にいう、主人公補正。このため幸運や直感などが働かないときがある。ぶっちゃけ、神のミス。しつかりしろ幼女神。

#### 武器

##### ・魔法杖（世界樹産）

原作ナギが使つてる杖と兄弟杖。世界最高峰の魔法発動体。

##### ・？？？

マギにとっての最強の切り札。でも形が嫌いで緊急時以外使わない形は本編でわかります。

## 紹介

ナギの血を分けた一つ上の兄。弟の突然の行動にいつも悩まされていると思っているが、トラブルメーカーなのは主人公も大して変わらない。

前の世界で葱で転んで死んだという何とも悲しい人。なんかよくわからぬところで、神様に出会い能力をもらい転生。原作は知らないらしい。

性格は割とドライで大人しいが一度Sの心に火がつくと、あの鬼畜幼女大好き神アルビレオ・イマまで引くぐらいのドS大魔王様。本いわく世の中攻めてなんばらしい。うん、意味がわかない。

魔法の訓練を始めたころからチート開始。現存する魔法は禁術以外ほとんどマスターし、アリアドネーの学者が不可能とした『魔法反射』を作り出した天才。現在新しい魔法と失われた魔法<sup>ロストマジック</sup>を研究している。

また、情報収集が趣味でよくノアの能力を使っての諜報活動をしており、黒いノートを持つてはあちこちの組織に入り込んでいる。本当お前はどこにスパイだ、と言いたい。蛇足ではあるがナギたち紅き翼のメンバーはその黒い本のことを「デス・ノート（社会的意味で）」と原作のファンに怒られそうな名前で呼んでおり、それが世間に出てないことを祈っているらしい。

戦闘スタイルは基本後衛。しかし前衛ができないわけではなく前世の記憶にある合気道を主体とした柔の格闘術。また魔力によるリストにより身体能力を2ランクあげることができ、近接専用の新魔法『メシアの祈り』は魔力の半分を代償に5ランクあげることがで

きる。ただし、30分だけ。

## 主人公紹介（後書き）

次回、ヒロイン登場！？  
こつこ期待！！

謎の鉄仮面美女！？（前書き）

なかなか難産でした。

連合で仕事を始めてから早一年、俺たちもだいぶこちらの生活に慣れてきた。途中辺境の森に任務で赴いたときフイリウス・ゼクトと、いうみため白髪のショタにあいナギとの戦闘になった。結果ナギがけちょんけちょんにやられた。で、ナギがゼクトに弟子にしてくれと嘆願、最初のうちは断つていたが、毎日に訪れるナギに根負けし魔法を指導してくれることになり、紅き翼の一員となつた。ゼクトは見た目あんなんだが、実際は不老で俺たちの中で一番の年長者。魔法の技術も俺より上だつた。いやあ～天才なんて言われていたから天狗になつっていたのかな。

さすがに悔しかつたので俺も弟子入り。この修行で俺は眞のチートに目覚めたよ。ゼクトは長い間生きてるだけあり、古代呪文など現代では使い手が少ない魔法など見せてくれた。そのおかげで今まで滯つっていた新魔法が次々完成した。完成した魔法をゼクトに見せに行つたりしたときなぜか遠い目をしながら、こやつもバグか、と呆れた声が聞こえたのは氣のせいだと思う。で、一ヶ月でゼクトおじいちゃんの魔法免許皆伝をもらつた。ゼクトお爺ちゃんありがとうと言つた瞬間、萌える違つた『燃える天空』が撃ち込まれた。以外に歳を気にしていたらしい。

ナギはいまだアンチョコ見ながらだが、魔力運用及び術式の理論的展開ができるようになりかなりレベルアップした。ぶつちやけた話、

基礎もできていなかつたナギの成長率はすさまじく、本来の膨大な魔力と精靈の加護を受けているナギは魔法世界の中でも上位に上がってきている。これでもう少し頭良くなるといいんだけど。いつのことアリアードナーにぶち込むか？

詠春は自分の剣を見つめなおし、一族の一つの極致、反転をものにしようと修業を重ねた。反転しているときはバーサーカーみたく理性が吹き飛ぶらしくそれを制御失敗するたびに俺の新魔法の実験台になつていて。修業をはじめて半年何か少しつかんだらしくニヤニヤしていたのでムカついて詠春恥ずかし写真を俺たち紅き翼のホームページ（俺が作りました）に載せた。その後、俺のパソコンが真っ二つになつた。あれ、二十万したのにORT

アルは俺と一緒に情報取集したり、ナギの魔法修業を手伝つたり、ゼクトと魔法談義したり、詠春をからかつたりしている。あれこいつ仕事してねえ。この前も幼女ナンパしてたし。明日あいつの寝室に熟女の写真で囮つてお婆ちゃんボイスの目覚まし時計仕掛けよ。次の日アルは飯を食べなかつた。すまんアル、やり過ぎた。

で、俺はというと魔法の修業が一段落ついたので、今度は気のほうを重点的に鍛えることにした。気とは生命エネルギーと深く関わっているものなので修業メニューは体を鍛えることから始まつた。転生してから魔法に頼りっぱなしの俺は魔力ブーストがなければ身体能力は一般人とあまり変わらない。そのため修業当初は筋トレを中心とした。ここでつける筋肉はボディービルダーごとくムキムキではなく戦闘に応じた体作りをしないといけない。

筋肉には先に述べたボディービルダーのように見えるアウターマッスルと表面ではなく中にあり見えないインナーマッスルがある。このインナーマッスル、普段余り使わない部位のため鍛えるのがすごくきつくなる。筋肉がとても熱を持ち始め熱くなる。本当に地獄だったが半年鍛えることによって柔軟性のある細マッチョとなつた。前世では運動嫌いの自分だったが、この修行を通して体を動かすのが好きになつた。

話しが脱線したため戻すが、残りの半年は詠春との組手と、漫画をもととした氣を用いた術の開発に勤しんだ。この術の開発で『NARUTO』でお馴染みの影分身の術を完成させた。これにより原作の主人公ごとく膨大に分かれたりはしないが一人が魔法、一人が氣、一人が諜報と活動幅が増えた。ちなみにナギにこれを教えたところ一発で成功。なんとなくで出来てしまつたという弟に軽く殺意が芽生えた。かなり落ち込んでいる俺に詠春がお前もあまり変わらないと言われさらりと落ち込んだのは秘密である。

と、まあ途中何ともふざけたこともあつたが割と充実した一年だつた。後、赤き翼の目的が変わつたこともこの一年の中のことだ。最初の頃はリーダーであるナギの力試しが目的だったが、任務中ナギと仲良くなつた一人の少女が流れ弾に当たり治癒魔法が碌に使えないナギでは手当が遅れ亡くなつてしまつという戦争ではありきたりな悲劇があつた。ナギはそこで初めて自身の持つ魔法という武器の恐ろしさに気付く。茫然と少女を抱きしめるナギを見て俺自身も深く考えさせられた。自分がよく考えづに撃つっていた魔法でどれだけの人が亡くなつたのかと考えたとき激しい自責の念に押しつぶされそうになつた。

それからナギと俺は今まで力を入れてこなかつた治癒魔法をゼクトから学んだ。そして方針である、戦闘ではなくこの戦争をいち早く終わらせるために戦うと決めた。矛盾を孕んではいるがすでに俺たちは立ち止まることができない。まあ、まともな死にかたはせんだけれど。

戦争を終わらせるためマクギルなどに働きかけているのだが状況はお世辞にも芳しくない。しかも諜報活動を続けているうちにこの戦争自体がきな臭くなつてきた。俺の直感がこの戦争は何か裏があると見た。

そんな訳で、俺はまだ調査していないウェスペルタティア王国の首都オスティアに来ていたのだが、途中フード着た人物が所謂DQNに絡まっていた。無視しても良かつたんだが、後味が悪い。そう思つて声を掛けたのが全て神によつて仕組まれた運命だつたのかもしない。これは俺にとつては最悪で、後から最高と変わる出会いだつた。

side out

???? side

妾はアリカ・アナルキア・エンテオフュシア、この国の姫じや。最近、国境付近で帝国の部隊が駐屯しているらしく、國の中はとても

緊張している、さう聞いた妻は視察のため町を歩いていたのが失敗じゃった。

「おい、お前！俺の肩にぶつかっておいて謝罪の一つもないのかよ。

」

町を歩いている最中、モヒカン頭に呼び止められた。周囲にも生理的に受け付けられないとような取り巻きたちがいる。肩にぶつかった感触はなかつたがここは穩便に済ませつ。

「ふむ、すまかった。これで良いじゃうつへ。」

「てめえ、なめてんのかーぶち殺すぞーー！」

「誰が貴様などをなめるかー気持ち悪いのはこの下郎がー！」

何を言つかと思えば言つて事欠いてなめるとな、ふざけておる。

「やつこいつ意味じゃねえよーてか、お前たちもなに一歩下がつてんの？」

「いや兄貴にそんな性癖があるなんて……いや人の趣味はそれぞ

れですよ。気を落とせなごでください。」

「いやそりこいつ性癖とか無いからね！頼むからそんな可哀想な子を見るのは田つきで見ないで……」

なにせ、いつも変態らしくな（勘違）です）。揉めてこの間に逃げよう。

「だから、だから違うって……うん？ てめえなに逃げようとしてんだよ。てめえのせいだらうがこの状況は……」

奴はそういって拳を握り殴りかかってきた。小さい頃から護身術を習つてはいたが突然のことで身動きが止まってしまった。殴られる。

そう思い田をつむり衝撃を待つがなかなかこん。さすがにおかしいと思い恐る恐る田を開けると……赤毛の少年がモヒカン頭の拳をつかんでいた。

「て、てめえなにもんだ！？ 手を放しやがれ。」

「いやあ～手放すとまた殴りかかってくるでしょうに。しかも君変態らしいじゃない。お袋さん泣いてるよ？」

「だからだから、俺は変態じゃないんだ。信じてくれよ。」

「犯人はみんなそう言つただ。せつせと吐いて樂になつちまえよ。」  
アルフレッド・イマ

「…………もつこー。お前らやつちまつぐ。」

「「「ねつこー。」」」

少年とモヒカンのよくわからない言葉の応酬は少年に軍配が挙がつたが今度は暴力により訴えるようじや。いかんここのままでは罪の無いこの少年が変態の餌食になつてしまつ。

「お、おぬし早く逃げるの「これだからDQNは。口で勝てんとすぐ」に手が出る。カルシウムが足らんぞ。小魚食べろ、小魚。」じや。はあー？」

一瞬じやつた。妾の見えぬスピードでモヒカンたちを氣絶させた。いやつ見た目に似合わざなかなかの強者らしい。

「よつ、大丈夫か嬢ちやん。」

そんな」とを考えている間に先ほどの少年が転んだ妾に手を差し伸べてきた。といつより妾は嬢ちゃんじゃないわ。そう文句を言つてやがりと立ち上がりうつと力を入れたら、

「い、腰が抜けてしまつたらしいのじや。」

何たる不覚。王族としてあまりにも情けない。少年も爆笑しどりでない。

「ぶつ、はははすまんすまん。せれ、家まで負ぶつてやるよ。」

「なつ／＼そんないとせんで良」。

「じゃあどうやって帰るんだ?」

ぐぬぬ、ソレは少年の好意に堪えるしかないか。

「ぐ、変な所を触るでないぞ。」

「おーおー、自意識過剰の女は持てんぞ。」

妾は即座に王家の魔力を纏つた拳を無礼者に振り上げる。

「うげっー。」

少年が数メートル飛んだ。爺仕込みの王家パンチに死角なし。

「てめえ、なにしやがるーてかなんで俺の魔法障壁をすり抜けたー！」

「乙女の怒りじゅー。」

「ビーーの世界に男をぶつ飛ばす乙女がいるんだよー」の暴力鉄仮面ー！

「ビーーに男なんかがおる。妾の前に立るのは塵屑に等しい有機物じやー。」

「ーの枝分かれ肩、助けつてやつたことの恩を仇にしやがつて、ておーいなにそんなに殺氣出されてるのー。」

いやつせ眞つてせなひなじとを眞こねつた。

「だ・・、え・わ・・ま・じゅ」

「はい？聞こえませんよ？大きな声ではさせと聞こましょうって  
学校で習いましたか～」

「だれが、だれが枝分かれ眉じゃ――――！」

「ふべらー」

注意・女性の身体的特徴をネタになると主人公の「」とへ星になってしまふので、世の男性方は気を付けましょう。

side out

マギ side

現在俺はオステイアの町を回っている。事の発端は俺の余計一言が原因だ。反省もしてるし後悔もしてる。ただ、今の状況は納得できない。

「ほれ、さつあと歩かんか。」

「お前俺におんぶされている身分のくせして態度アカすがるだろ。」

「ううこの厚かましい金髪美少女をおぶつながらの行動だ。重くはな  
いが動きづらい。」

「身分差別は好きではない。」

「じゃあ少しば俺を労われこの能面鉄板少女。はあまい。そう  
いや名前聞いてなかつたな。俺はマギ・スプリングフィールド、あ  
んたは？」

「妾はアリカじゅ。都合あつて下の名前は教えられん。…………ちよ  
つと待て、お主の名前はマギ・スプリングフィールドといつたな？」

「ああ、やうだね。」

「それじゃ、お主が紅き翼の『紅薺の魔王』か？」

「まあな、俺その呼び方嫌いなんだけどな。」

「うんホント嫌い。どこの厨二病だよ。まだ、戦場カメラマンがいい。」

「じゃが、なぜ蒼なんじゃ？紅は髪の色とわかるのじゃが。」

「ああ、蒼も髪の色からきてるのや。」

「お主つこにボケたのか。ビックリ見ても赤髪じゃね。」

これ良く言われるんだよね。お前どこから見ても赤いじゃんて。前に俺は魔力超過現象という病気を患つていてマジックアイテムで自分の魔力量を抑えていたのを覚えてるかな。あれはいわばリミッターみたいなもので、つけている間はいろいろと制御されているわけ。だから本気を出すときや緊急時の時には『ハーメルス（神を縛る紐）』という髪留めを外すわけ。そうするとなぜか知らないが髪の色が青くなるのよね。この病気の人はみんな青い髪の色をしているらしいけど。まあそんなリミッターを外しているときの俺は絶賛無双状態。そのイメージが帝国にあるらしく、めでたく厨二な一つ名がついたわけ。

「なるほど、そういうことじやつたか。まあよこ、せつと行くぞ。」

「へいへいお姫様。」

「の皮肉が実はす」「目的をいた発言だったことに気付くのはまだ先のことである。

『緊急避難警報！緊急避難警報！オステイアに住む一般市民に告ぐ。現在帝国の大部隊が国境を越え我が国に宣戦布告。至急避難するよううに。』

なんだ急に。帝国がこの国を落として何のメリットがある。

「おい、アリカ嬢。あんたをすぐに避難場所に転移させるからよろしく。」

「ま、待て妾はここに「悪いがこここの防衛に行かないといけないからな、縁があつたらまた会おう。」人の話を聞け…」

とにかく転移をすませたからあのおつかな美女は大丈夫だろう。なんか言いかけてたけどなんだつたんだろう。いや、今はナギたちに現状を伝えこここの防衛線を手伝つてもらわないと。

『おい、アニキ聞こえるか。今俺たちはオステイアに任務で来てる

んだがアーキも早く来て手伝ってくれ。』

ナイスだ、ナギ。お前の行動力には感心する。

「それなら大丈夫だ。俺もこれからに来てこる。お前は今どこにいるんだ。』

『おお、さすがだなアーキ。俺たちは今城の離宮に来てんだ。帝国が鬼神兵を出してくるから俺たちでもきつくて。』

確かにあの団体でかい奴は厄介だな。

「わかつたすぐ向かう。やられるなよ。』

『へへ、誰に言つてんだアーキ。俺は最強の魔法使い「千の呪文の男」ナギ・スプリングフィールド様だぜ。アーキが来る前に終わっちまつてるぜ。』

「まじ、じゃあ俺いかね。』

『冗談だからね、冗談。早く来てくださいお兄様。』

ナギよ。お兄様気持ち悪いからやめてくれ。それは妹キャラじゃない  
と駄目だ。

side out

## 謎の鉄仮面美女！？（後書き）

ギャグ路線のはずが前半はかなり暗い感じでした。

戦時中は少し真面目かな。

やはり微妙。

アリカ姫初登場。うまくかけていたでしょうか。

次回はオステイア防衛戦。

よろしく。

**幼女を守れ！（アル活躍編）（前書き）**

最初に題名はアルの部分は嘘です。

かなりの難産。

駄文ですがお読みください。

## 幼女を守れ！（アル活躍編）

sideマギ

『総員退避！王宮に逃げろ！』

戦場の中で連合側の司令官と思わしき人物が撤退命令を下している。状況はこぢらがかなり悪い。オステイアに駐在する軍自体が少なく、國軍だけでは帝国との戦力差は歴然とある。そのため最後の砦である王宮の傍にて交戦をするのだろう。

「胸糞が悪い。オステイアの上層部は人の心があんのか。」

そう最後の砦である、黄昏の姫巫女アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシの下へと。

『さあ、鬼神兵だー！帝国が攻めてきたぞおー！』

クソ、急がなければいけねえ。鬼神兵となると並みの魔法使いでは歯が立たないだよなあ。てかあれ卑怯だろ。あれだよ、仮面ライダーが敵を倒すときウルトラマン連れてきたって感じだよ。え、意味が分からぬ。そこはあれだ、感じろ、空氣読め。バカなこと言ってないで早く行かないといけないな。

そう思い杖に乗って離宮へと飛ばしていく。途中でナギたちと合流。ナギは子供を戦争の道具にしてることにかなり腹を立てている。まあそりだよな。

ちなみにアルは

「戦争ですからねえ。見た目通りの年齢かすらわかりません。ですが幼女は愛でるもの。強制するものじゃないんです。」

と豪語されていた。前半は少しばまともかとおもつたが後半がすべてを台無しにしている。なんか病状が悪化していないか。

「いや、もう手遅れです。」

と、何か受け取つてはいけない電波を受け取つてしまつた。俺、この戦争終わつたら病院行こうかな、と死亡フラグなのかどうかわからぬフラグを立てたのは俺しか知らない。

『精霊砲全弾消失！』

『消失だと！？ 王都の魔法障壁では無いのか！？ まさか……！』

『広域魔力減衰現象を確認……減衰速度加速中、間違いありません。“黄昏の姫御子”です！』

やはり、この国の上は腐っているな。

「おー、みんな急ぐぞー。」

「やつですね、幼女のもとへと急ぎましょ。」

「はあ、二人とも先に行くな。」

「詠春あきらめる。バカとロココンは止まらない。」

俺は学習したんだ。詠春、お前も早く慣れる。やつしなければ、予定通り禿るぞ。

「俺は禿んーーー！」

そんな、緊張感のない中俺たちは姫巫女のところへと行くのだった。

side????

…私は何もない。…何も感じないし、すべてがどうでもいい。薄暗いこの空間で毎日を過ごしている。ここに来るのは食事などの面倒を見てくれるメイドと私に何かの薬を飲ませる気持ち悪い人間だけ。

「おい、早くこいーー！」

今日もまた痛いことがあるのだろうか。いつも鎖で私を縛る。でも、それすらどうでもいい。私は一人、いつも一人なのだ。

パリッン！ー！

私の能力で魔法が消える。私の能力は希少らしい。望んでない、そんなもの望んでない。

「そんなガキまで抱き出すこたあねえ。後は俺に任せときな

「お、お前は、紅き翼アラ・ルブア…千の呪文の……」

「そう、ナギ・スプリングフィールド！ またの名をサウザンドマスター……！」

「自分で言つたよコイツ」

「ナギ、嘘はいけないと思つぞ嘘は。」

「つるせえよ詠春、アニキ。さつさと倒しちまつぞ。さあて、行くぜ。百重千重と重なりて走れよ稻妻『千の雷』！……」

「へいへい、高速詠唱『ネギス・ネガサス・ネー・ジーサス、火の大精靈、水の大精靈、風の大精靈、地の大精靈、四大揃いて破滅へ導け、四大元素合成、根源消滅魔法 エーテリオン』」

「お前たちは……はあゝしようがない、神鳴流奥義真・雷光剣しん・らこうけん」

「ふふ、私も頑張りましようか、重力魔法」

私の前に突然現れた四人が敵を倒していく。

「ふう、すつさつしたな。」

「あらかたの敵は倒したでしょ!。」

「お前たちほんまは加減しろ。」

「もうだもうだ。」

「お前(アーニキ)がいっな(言わないでください)(言ひ聞け)  
ねえよ)……!」

「なにこれ、ひどい!」

私もそいつ思つ。

「さて、安心しな。俺達が全部終わらせてやるからよ

未だ私の傍にいる男に、そいつ叫ぶ。

「な、しかし。敵の数を見たのか!? お前たちに何が……

「俺を誰だと思つてやがる、ジジイ」

「俺は、最強の魔法使いだ！……魔法学校だけは中退だがな」

最後にぼそつと何かとんでもないことを言つたように思つたのは  
氣のせいだろうか。

「フフ……どれだけあなた個人の力が強かるつと。一人では世界を  
変える事など到底……」

「あーあー、るせーよアル。俺は俺のやりたいようによつてやるだけだ。」

「ナギ、私はあなたをそんな我が儘に育てた覚えはありません！」

「俺はアニキに育てられた覚えがありません！」

赤毛の二人が何か言つている。あつさつき一番とんでもない魔法を  
ぶつ飛ばした男と目があった。

その男は私を縛る鎖を壊してくれた。

「よつ、嬢ちゃん。俺はマギ。嬢ちゃんの名前は？」

「名前……？ アスナ、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・  
エンテオフオシア」

「うへん、長いな。呼ぶときはアスナでいいか。」

そつ言いながら赤毛の男マギは私の髪を撫でてくれる。とても温かい。

なんだか、胸になかった、いやなくなつた温もりが戻つてくれる。

私がこれが心であると気づくのはまだ先のことであった。

side out

一人の少女の救出の一歩田が始まる。彼女がこの世界のキー・パーソンであることをまだ彼らは知らない。

物語は更なる加速を見せる。

続く  
…

幼女を守れ！（アル活躍編）（後書き）

最近少しシリーズ。誰かシリーズスプレイヤーが欲しい。

やつとまともな魔法出せました。少し『FAIRY TAIL』からヒントをもらいました。

次回はみんな大好き？バグバカの登場です。お楽しみに。

## バグ対バグ。最後に裏ボス！？（前書き）

今回主人公はあることに気が付きます。

## バグ対バグ。最後に裏ボス！？

sideマギ

先の一戦から数か月たつ。あの後暴れすぎとメガロの連中があーだこーだ言っていたが、戦場にも顔を見せない奴らの言つてることなど無視していた。そのためか、最近の任務では地方に飛ばされてしまう。大方手柄をすべて自分のものにしたいバカが最近戦果をあげる俺たちを疎ましく思つていいだけだろう。まあそのおかげで暇ができ、いろいろと調べることができたんだが。

と、なんともお偉いさん方の事情であちこち飛びばされている我ら紅き翼はといつと…

「んつふふ〜〜」いつが旧世界は、日本の鍋料理つてやつかあ

現在、鍋パーティ中！

「じゃ、早速肉を〜」

「あつ、ナギ、おまつ・・何、肉を先に入れてるんだよ」

「トカゲ肉でも皿このかのひへ。」

「いいじゃねえか、旨いもんから先でよ、ホラホラ」

頼むナギ、ゼクトお前らは鍋に触るな。

「バツ、バカ。火の通る時間差というものがあつてだな。まずは野菜を入れて・・・あーちょッ」

「あーうつせ、うつせーぞえーしゅん」

「あー、しらたきのそばに肉を入れるんじゃない。肉が硬くなる」

「フフ・・・詠春。知っていますよ。日本では貴方のよつな者を、鍋将軍といつそうですね。」

ドカッン！

なんか効果音ついてるんだけど懲りすぎだろ（呆）。しかし、ナイスだぜアル。君のおかげで故郷の味は守られた。

あとマル、鍋将軍じゃなくて鍋奉行な。そういうつお茶田な所嫌いじやないぜ。すまん気持ち悪かつたな。

「へへ、詠春負けたぜ。」

「詠春、全て任す。好きにするが良い」

「あ、ああー・・・」

「詠春、前にも言ったがあやめぬ。」

「こいつらが人の言うこと聞くわけがない。」

「こつも慰めてくれ奴が一番とんでもないことじでかすから、素直に落ち着けん。」

「――」（やうじやな）（やうじですね）

「前ひ最近厳しあがいるが。俺のライフもばざロムー。お前

「おお、これは醤油か。相変わらぬまことのう

「ホントだ。うめえつーー？」

「これこそが日本の誇る醤油だよ」

懐かしい味だ。お袋さんーーって前世のババアは死因の原因。葱で祟つてもいいかな。

「それに大根おろしですね」

「これがしょうゆか、スゲエうめえつ」

「ナギ、お前は日本に来たとき寿司食つたる」

「詠春、ナギは三日前のことさえ忘れてしまつスーパー鳥頭なんだぞ。一年前のことなんかきれいきつぱり忘れてるだろ？」

「なんだ、俺スーパーなのか。やつたぜ。」

「ごめんナギ、お前はウルトラだ。

「でも、姫子ちゃんもへわしてやつたこへりこの皿だな」

「姫子ちゃん……？ああ、オステイアの姫御子の」とじやな？」

「やうだな、あんな子はまだ使つとはせも末だよな。」

「まあ……戦が終われば彼女を自由にする機会も掴めるやも……です」

「あびつだな。あれだけの能力、権力者がほつとく訳がない。そあびつだな。」

「その戦だが、やはり戦いも不自然に思えてならん」

「それなんだが、どうやら裏である組織が動いてるやうだ。」

「ある組織とは？」

「ああ、実態はまだつかめてないが組織名はわかった。『完全なる世界』奴らが何らかのアクション起こしてるとみて間違いないと思つ。」

「完全なる世界ですか。ずいぶん高尚な組織名ですね。」

「じゃあ、そこついをぶつ飛ばせばこの戦争も終わるのか…」

「そう簡単にはいかんじゃねえ、ナギ。」

「だらうな。もともとの原因が人間と亜人の不和からくるもの。根本的な部分が解決していない。」

「ですが、何も道しるべがなかつた当初より動きやすくなりりますね。あなたの諜報活動のおかげです、マギ。」

まあ、情報は戦場において命に等しい。偽の情報で部隊一つが壊滅などよくある話だ。

「何が?」

「何もかもだよ。お前が言い出したんだらうが、鳥頭。それと肉ばかり喰うな」

「詠春、ナギはバカだから自分で言つたことも覚えてないだけだ。」

それとナギは野菜だけ喰つてゐ

本当、人の話は聞け。そんなんじゃ社会じゃ生きていけんぞ。まあ  
こここの場合全て感で生きてるからな。お前は野生動物か。

うん？これは何かくる…（久しぶりの直感スキル）

あ！鍋が、愛しき故郷の味が！！

「食事中失礼～～～。俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン！！  
いつちよやうひん！」

殺す、俺のすべてをもつて殺す。

「何じや？あのバカは？」

「帝国のつて訳じやなせーだな。えいしゅ・・あ、おー・？」

「フ・・フフフ・・食べ物を粗末にするやつは・・

「どーしたー来ねーのかあーー。来ねーなら」つちから・・ニッ

「ぬぬ」

「斬る」

ねまつて男の出す声じゃない。間違いない奴は露出ホモ野郎だ。

「おっ、詠春の攻撃凌いでるぜ！」

「あの大男やりますよ。見たことがあります。いつもと前、南で話題になつた剣闘士ですよ」

「詠春、やるんだ。露出狂としてはお前のほうが勝つてるぞー。」

「うつタソマタン。あんたマジでつええな。ちよい待たね？」

「ふざけるな。やる氣なら本氣を出せ貴様ッ！それとマギ私はお前のせいであんなことになつたんだーー！」

「へつそ・スか。それよりお前変態なんだな。新たな情報だぜ。」

へへ、奴さんも情報の大切さがわかつてゐるらしいな。

「情報その1・生真面目剣士はお色気に弱い。+露出狂」

「くづ・・・卑劣な。後貴様に露出狂などと言われたくない!いや、何のこわしき。心頭滅却すれば火もまた」

詠春はカプセルから出てきた女性に囮まれ目を閉じた。アホだらあいつ。それよりアル、幼女の精霊をみてハアハアするな。

「フ。ホイー丁あがり。ぬんつ」

「おう、出たな・・情報の4。赤毛の魔法使いは弱点なし。特徴、  
無敵」

「いや、その子魔法覚えられないで弱点あるよ。めめめら、手口出すなよ。それよりアーキ、相手に恥ずかしいこ

と言わないでくれー！

ナギ、君に恥ずかしいという感情があったことが驚きだよ。

「言わねずとも」

「バカの相手はバカにさせるのが一番じゃ。」

「奇遇だな小僧。俺も南じや無敵と滅法尊の男だ。」

「いやだから俺が弱点リークしたよね。無視なんですか、そんなんですか。」

「へへ、おっせんこいのかよ？剣なしで。」

「心配すんな。俺は素手のが強え。」

「アル、少し俺はここから離れるわ。」

「おや、どこに行くんですか。」

「いや、あの筋肉ダルマに誰を敵に回したか思い知らせるためにな。ケツケツケツ。」

「へ、そりですか。お、お気を付けて。」

食べ物の恨みは恐ろしいのだ。貴様を必ず絶望へと誘つてやる。

んで13時間後。環境破壊、その言葉に及きぬほど、荒野は荒れています。帰ってきたものがすべて壊れていました。本当に少し自重しろ、このバクども。

「フ・・フフ・・・やるじやねえか小僧

「あんたこやな」

「いや、5対1で挑んでおいてこの様じやあ・・・俺の完敗か

「俺は・・俺に並ぶ人間が3人もいたってことで満足だぜ。いやア二キは俺以上につえーか。」

「なんだ、お前より強い奴がいるのか。やべえ、闘いてえー。」

「なんだ、そんなに闘いたいのか。しょうがなに闘つてやるわ。」

相手から「所望だ。俺はノートを開き話し始める。

「やばい、お前早く負けを認めろ。」

「なに言つてんだ。まだ闘つてもいいの。」

「あれはあれは、触れてはいけない、パンドラの箱なんだ！」

「ふふ、もひすでに遅い。」

「ジャック・ラカン、これは何かわかるかな？」

「なんで俺の名前を…………てーそれはーー。」

「ああ、愛しのアミー「やめてくれ！俺が悪かった。だから後生だやめてくれ。」ん？なんで、謝ってるの？勝負だよ勝負。」

なんかナギたちもこのノート見たらジビツてんだけど。アルさんあんたいつもの胡散臭い笑みはどこに行つた。詠春、気絶のふりやめようか。ゼクト、何こんな時だけ爺ちゃんぼく茶飲んでんの、現実逃避やめて。最後にナギ、なにそんなにごめんなさい、ごめんなさいって謝つてんの。

「こんな勝負ねえよ！ま、待てよおいあんたの名前はマギ・スプリングフィールドなのか？」

「ああ、それがマギだね。」

「情報その5マギ・スプリングフィールド。敵に回しては駄目。機嫌を損ねても駄目。まず前提に關わっては駄目。…………ふつ情報通りだぜ。」

バチバチバチバチバチバチ！――――――

俺は素早く雷の暴風を二発撃ち込む。

「俺はどこかの裏ボスだあーーーーー！」

「ゲボラッパ！！！」

さうに荒野が荒れたには言つまでもない。

その後何度も俺たちにちょっかい出してはナギと戦闘、疲弊してるとこりに俺の口撃（ムカついたときは手が出ます。）がサイクル化して、いつの間にか仲間になつていた。なんで、仲間になつたのか聞いてみたら、俺を敵に回す位なら龍樹（魔法世界生物の最高レベル）と鬪つほうがましらしい。

俺が何したよ。

バグにさえ恐れられる俺ってどうなんだろ。

自分の規格外差に初めて気づいた瞬間だった。

side out

後日、何か哀愁漂うマギを見かけた人がいるとかいないとか。頑張れマギ、負けるなマギ。

続く…

## バグ対バグ。最後に裏ボス！？（後書き）

やつと、自分の規格外に気づきました。環境が環境なため自分がまともと思っていた彼ですが、今回のことでの認識が変わりました。

ですがそれでも自重しない。そんな感じで頑張っていきます。

次回奪還と協力者の会合まで行きたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4842y/>

---

魔法先生ネギま！アンチなにそれおいしいの

2011年11月30日15時49分発行